

今日も今日とて。

不皿雨鮮

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界観、登場人物、ジャンル、全て不明の世界で。一人々数十人以上の誰かが何かをする話。

なんで何もかも不明瞭かって？ だって決まってないからな！

目次

こう、なんか色々匂わせてみたけど、特に深く考えてないプロ ログ	1
雅とローズ。そして吸血鬼『ラヴ』 まずは雅の設定とか考えてみた。そうか、お前西条って言うのか。	3
唐突に始まる過去編。どう考えても変。	7
ローズの名前、書いている間に三回間違えてるけど何も問題ない。	11
亨と耀。彼らのチート。	16
亨と耀。彼らの日常	19
耀Side どうせチート	22
プロログに戻って来るの好きなんです 俗に言う本編という奴です。	24
話をようやく進めます。	28
晴香は語る。人生を。怒りを。	31
そう簡単に雅は決断をしない。それは過去の経験に基づく。	34
STRA T	36
世界が求めるモノ。それを求める者。つまり、彼が求める者。	40
鑑賞そして、干渉者。	38
火薬庫に、火花が落ちる。	40

こう、なんか色々匂わせてみたけど、特に深く考えてないプロローグ

昼休み開始から十秒で、少年と少女の声が廊下に響き渡る。

「んのクソボケがあああつ!!」

「だっはっはっはっ。寝てる方が悪いのよ!」

全力疾走する少女と、それを追う少年。過ぎ去った後にはほんの少しの風が舞っていた。

「寝てる間に弁当を全部食う奴がパーヒャクで悪いに決まってるんだろ!?!」

「だってそこに弁当があつたから」

「鞆の一番下に入れてたわ! ってか、弁当が目の前にあつたとしても食うなよ!?! 登山家か!?!」

以上が、東校舎二階、二年一組の教室から中校舎を挟んで西校舎一階の食堂に辿り着くまでのやりとり。階段含め、距離にして約百メートル。会話も疾走も超速である。

そんな超速的一幕の間に通った教室や職員室、はたまたすれ違った人々に呆れはあれども驚きの表情が少なかったのは、これが日常だからだ。

教師も生徒も、はたまた学校周辺にいる人々も、小さく溜息を漏らしてこう言うのだ。

「また亨アキラと耀ヒカリか」と。

今日も今日とて、彼らは騒がしい。

「亨と耀について教えて欲しい? くくっ、まあ、そりや気になるわな、転校生。それもあいつらについて何の前情報もないとなると尚更か?」

「まあ、そんなところです。お二人の名前とお姿はよく見ますが、結局彼らが一体何者なのかはあんまり分かりません。話しかけようにも休み時間は何かしらしてますし」

放課後、二年一組の教室。染めた金髪と地毛の金髪の二人が誰もいなくなつた教室で話をしていた。着慣れた制服と着られている感ありありの制服。地毛金髪、幼顔の問いに染めた金髪の少年が答える。窓から入る陽の光は透明で夕暮れには程遠く、運動部のまだまだ体力の有り余つた掛け声がグラウンドから聞こえてくる。

「んー、アイツら、なあ……。まあ、いい奴だぜ。頭も運動神経もいいけど、一緒にいると心臓に悪い」

「まあ、確かに賑やかな方だなあとはボクも思います」

爆発音がしたと思えば耀が教室の扉を勢い良く開けた音だつたり、銃声が聞こえたと思えば彼ら二人がハイタッチをした音だつたり。毎日、誰かの心拍数を上げていることは確かだ。転校してきたばかりの彼もまた、驚くことは多い。

日々彼らが強く開けるせい、扉の両縁はかなりすり減つてしまつている。

「……そう言えば、放課後はいつも静かですよ。彼らなら、放課後も学校を賑やかにしてくれそうなものですが」

「騒がしい、でいいんだよ。ああいうのは。まあ、そりゃ、放課後は静かだろうぜ、何せアイツら、——だからな」

「なるほど、そういうことでしたか」

得心の言つた様子で頷いて、それで副題は終わりだ。周囲に誰もいないことは確認できた。

「……さて、それでは『本題』の方を始めましょうか、ミヤシ雅さん」

「そうだな、ローズ。例の依頼だが」

今日も今日とて、金髪達は静かに事を運んでいく。

雅とローズ。そして吸血鬼『ラヴ』

まずは雅の設定とか考えてみた。そうか、お前西条つて言うのか。

コツ、コツ、コツ、と夜道に足音が響く。時々、街灯に照らされて男が持っているアタツシユケースが輝く。対称的に男の着ているスーツは黒く、光を吸収しているかのようにだった。アタツシユケースの中にはあまり物が詰まっていならしく、コトンコトンと音が鳴っている。

時刻は日付を超えてしばらく。会社帰りには、遅すぎる。勿論、ド違法な勤務形態をしているアレな会社の社員という可能性もあるが、極稀にすれ違う人々は彼を気にもとめずに過ぎ去っていく。まるで彼の存在に気付いていないかのように。

男はここから先は洋館だと強く主張するような門の前で立ち止まり、上着の内ポケットから携帯電話を取り出す。今時、開閉タイププッシュ式の携帯電話を持っているのは、時代の流れについていけなかった者か或いは過剰な便利さとは無縁なタイプの者かのどちらかだろう。

男は後者だった。

「私だ。前に着いた。開けてくれ」

もしもし、すらく男は用件だけを口にする。

「インターホンを鳴らせよ」

携帯電話から聞こえるのは少年の声。呆れたような口調、しかしどこか警戒も乗せた声色。それが二人の間の関係を少しばかり表していた。

「悪いな。潔癖症なんだ」

「嘘吐け。ならこんな仕事、しねえだろ」

「違くない」

くくつと不穏当な笑い声を漏らしている間に、ガチャリと門は身勝手に開き、男を誘う。

ほんの少しの道を歩いて男は玄関の扉を開ける。開けてすぐ、制服のまままで出迎えたのは染めた金髪の少年こと、西条雅。

「全く。来る度に、高校生には相応しくない家だと思ってしまうな」
「それは俺も思う」

辺りを見回す男に、雅も同意して笑う。玄関を開ければ、二枚扉よりも幅の広い階段があり、上を見上げれば左右前と、どこかへと繋がる扉がある。どの扉も二枚扉であり、それだけ各部屋が広いことを意味している。

「まあ、俺も正直使い余してんだよ。二階の右の部屋とか使うか？」
「誰がお前なんかとルームシェアするかよ」

「この場合、ルームシェアって正しいのか？ 部屋貸しだから賃貸の方が近い気がするが」

「どうでもいい。お前と一緒にいたら、ストレスでハゲる」
「——で、まだ完成してない訳か？」

唐突に話を区切って、雅は本題を振る。この男が無駄話をするということは、本題を避けようとしているだけ。

「……まあ、そういうことだ」
「ほお。じゃあ、その中身は何だ？」

「試作機つてところだ。理想には程遠いが、近いくらいの性能はある。まあ、何も無いよりかはマシかと、思ってたな」

言って男はアタッシュケースを玄関の段差に置いて、扉まで下がる。

「はんつ、だから失敗作を持ってきたってか。……まあ、いいか、俺も少し無理させ過ぎた。正規品はまた次でいいさ」

「次、か。分かった、アイツらにも言っておこう」
言い捨てるように男は翻して、屋敷を出て行く。

「相変わらず仕事人間だな、お前。家族とか、作れよ？」
アタッシュケースを持って、雅は男と同じように翻して一階の玄関正面の部屋に進む。

「ガキにどうのこうの言われる筋合いはねえよ」
「さいでつか」

ガチャンと、玄関の扉と部屋の扉が同時に閉まる。数分だけの邂逅、それでも雅は男との接触を欠かさない。それが、雅の役目だからだ。

「雅、今の誰？」

雅が入ったのは一応は客間だ。とはいえ、この屋敷には客間に入る程、長居する人間はいないが。なので、その客間は声を掛けた少女の自室のようなものになっていた。

「いつもの人、だ」

「あのおじさん？」

苦笑いをしながら雅は少女の問いに首肯する。確かあの男は二十から三十代だったはず。おじさんと言われる程の歳ではなかったはず。少女の純粹さは時として毒だなど、雅は思う。

「……雅、お腹空いた」

どうやら少女は「訪問者が誰だったか」にしか興味がなかったらしく、マイペースに次の主張をし始める。座ると体が沈み込んでしまうソファに寝転んだままなのは、空腹で動けないからなのかそれともものぐさだからなのか。

雅もそんな少女の態度には慣れっこだった。雅はアタツシケースを前に置いて、「ん」と首を差し出す。すると少女は霧状に変化して移動し、雅に背負われるような体勢で再度人の姿を取り戻し、かぷりと首元に噛み付く。

「っ。——つと、さて、中身はっつと」

多少の痛みを感じながら、雅はアタツシケースを開ける。中にあったのは、適当な梱包をされた四つのブレスレット。どれも形は一緒で赤青白黒の色違い、厚みは〇・五センチ、幅は一・五センチといったところのコンパクトなもの。雅が赤のブレスレットを右腕に着けたところで少女は食事を終えた。

かぱっ、という音と共に少女は雅の首から口を離す。鋭く伸びた犬歯から血が滴り、雅の首元には二つの穴が出来ていた。不思議と、首元から血が出ることはなかった。

「……ん。ありがと。そして、おやすみ」

言って少女は雅が入った扉とは違う扉から自らの本当の部屋に戻っていく。

「今度はいつ起きるんだ？」

「目が覚めたら」

バタンと、扉が閉まり同時に静けさが雅の周辺を包み込む。つまり、起きた時が起きる時ということらしい。

「相変わらず、吸血鬼らしくねえやつだな」

呟いて、立ち上がろうとしたところで軽くふらつく。

「あいつ、結構な量吸いやがったな……。くそっ、俺も寝るか」

ふらふらと、重い足取りで雅もまた自分の部屋に戻って行く。彼女の食事係。それもまた雅の役目だった。

唐突に始まる過去編。 どう考えても変。

それは一年前のことだ。

三月の上旬。 寒さはまだまだ厳しく、歩道も車道も白い粉がまぶさ
れている。 呼吸をすれば息は白み、手先はかじかんでいる。

「ここか」

洋館の前で少女は呟く。 綺麗な金髪は夕日に照らされて輝いてい
るが、それを見ている人は誰もいない。 一体なぜ、こんなところにそ
んな少女がいるのかと疑問に思う人もいない。 ほんの少し道をズレ
れば人々が行き交う商店街があるというのに、その洋館の周囲はまる
で呪われたかのように人の気配がない。

少女が抱える特務の性質上、形式上、とりあえずここは訪問しなけ
ればならなかった。 だが、どうしてもあと一步、インターホンを鳴ら
すことができなかった。 緊張と警戒、そして恐怖の混合物。 そうこう
している間に、一時間は経っていた。

「ん、お前誰だ？」

「うひゃあっ!？」

突然声を掛けられて、少女は驚きの声を漏らす。

ガシヤンと門に背中を着け、声の主を確認する。 特徴的なのは金
髪。 染めているらしく頭皮に近い部分は地毛の黒が見えていて丁度
プリンのようになっている。 学校帰りのようで、学生服を身に纏い
リュックを背負っている。 片手にはコンビニのレジ袋があり、ペット
ボトルや安価なスティックパンが少しだけ見えていた。

「だ、誰っ!？」

「こっちの台詞だ」

はあ、と溜息を吐きながら少年は少女の足元から頭のとっぺんまで
軽く一瞥する。 少女の容姿にどうやら心当たりがあったらしく、少年
は得心のいった表情を漏らした。

「ああ、お前がアビーか」

「ッ」

あっさりとは雅は名前を看破した。

「代々受け継ぐニックネームはローズ。バラの茎のような棘で絡みつく『監視者』の命を持つ『ラヴ』の家系の一つ、であつてるか？」

その通り、という返答の代わりにローズは尋ねる。

「貴方は西条雅ですね？」

「いかにも。お前達風に言うなら、俺は眷属つてやつか？ 『ラヴ』曰く、厳密にはそうじゃないらしいが」

「……貴方、『ラヴ』と話したことがあるんですか？」

自分の素性が知られていることや、こうもあつさりに対象と出会えたことよりも、そのことの方がローズにとつて驚きだった。吸血鬼。大昔が生きる化物。どう考えてもコミュニケーションが取れるとは思えなかった。ローズの頭の中には『ラヴ』という存在に、そういうイメージが根付いていた。

「そうだが？ なんだ、お前ら、実は全然『ラヴ』のこと知らないんじゃないの？ 『監視者』なんて言うから、あいつの面白い話とか聞けると思ったが、期待外れみたいだったな。やっぱり、くだらねえ」「なっ!？」

雅は驚くローズの顔を見ることさえせず洋館の中に入っていく。

「ま、待ちなさいよー!」

扉が閉まる直前、雅は一言、ローズに言い捨てる。

「帰れ」

その言葉は酷く冷たい。まるで氷漬けになったように、ローズは上げた手を降ろすこともできずにその場で立ち尽くしていた。

「酷いね、雅。一応は、私の娘なのに」

扉を閉めたところでそんな声を掛けられる。扉の上、少し面食らつたものの、すぐに笑みを見せる。雅の目の前の吸血鬼『ラヴ』は、少しばかり不満気な様子だった。

「珍しいな、お前がここまで来るなんて。……云百年も違つてたなら、もうそれは赤の他人だ。血の繋がりになんてねえだろ」

「吸血鬼なんだから、血の繋がりが少しでもあれば気にするよ?」

「くくつ、吸血鬼ジョークか？ だが、もしもお前が本気であいつを娘こどもと思つてるなら、『監視者』なんて止めさせるべきだ。お前を嫌つて姓

も名も変えた癖に、未だにあんな血族の端っこにガキに『監視者』なんて役目を追わせるんだろ」

吸血鬼の家系と呼ばれることに怯えて、姓も名も変えた。しかし、それでも『ラヴ』に恐れて分家筋の人生を縛り付ける。その浅ましきはもはや滑稽を通り越して哀れみさえ感じてしまう。

「実は、あんまり気にしてない」

平然と、何食わぬ顔で『ラヴ』は言つてのける。しかし、雅が驚くことはない。そうだろうと推測していたからこそ雅は「もしも」という仮定を付けていたのだから。

「だろうな。お前はあまりにも無関心が強い。……だから、訳分かんねえんだよなあ」

「何が？」

「なあ『ラヴ』、どうして俺を選んだ？ 血液型はA型、何かに優れているという自負もねえ。平々凡々な俺を、どうしてお前は選んだんだ？」

血が特殊という訳でもない。人間性もまたありふれている。西条雅という存在は雅だけだが、雅と同じような価値の人間は多くいるし、雅よりも優れた人間なんてその倍はいるだろう。多くのものに無関心である『ラヴ』に、どうして自分が見初められたのか。それが雅には分からなかった。

「……………」

「『ラヴ』？」

「……………」

「……ああ、そうか。どうして俺を選んだんだ？ レイ」

レイというのは、『ラヴ』が雅にせがんだニックネームだ。「ラヴ」はテニスやピンポンで零を指す。だから読みを変えてレイ。そんな安易なニックネームだが、『ラヴ』はそれが気に入っているらしいのだ。「なんとなく、かな」

「そんなことだと思ったよ」

ほっとするような、しかしどこか残念な。自分の平凡性を認められたことの安心感と実は何か吸血鬼目線であれば他人よりも少し特殊

で優れたものがあるのではないかという期待が雅の内心で入り混じっていた。

「さて、どうしよう?」

少しの間のあと『ラヴ』——又の名をレイ——は言う。

「何がだ?」

「ローズ、ずっとあそこで止まってる。……多分、気絶してる」

「はあっ!? なんでだ!」

「多分、雅を見てショックを受けたんだと思う」

「俺そんなに酷い顔か……?」

「違う。それもそうだけどそうじゃなくて。雅の言葉」

「今かるーくけなしやがったな。血やんねえぞ?」

「ミヤビ、カツコイイ、本当……?」

「疑問形になってんじゃねえか! ってそうじゃなくて!」

「ここに入れたら?」

「いいのか?」

「……別に。合わないだけだし、会わなければいいから」

「お前の家だろ。お前が気を遣う必要なんてどこにもねえんだ。どっかに閉じ込めるでも構わないしな。お前が不自由になるなら、俺はあのままにしておくぞ?」

「じゃあ、誘拐という体で」

「拉致だな、どちらかと言えば」

「……どうでもいい」

「はいはい」

ローズの名前、書いている間に三回間違えてるけど何も問題ない。

意識の覚醒。泥沼から這い出るかのような、体の気怠さを感じながらローズは目を覚ました。

しかし、視界は真っ暗だった。

「——っ!? んんっ!?!」

声も出せない。視界も口も塞がれ、身動きもまた封じられていた。

「よお、目覚めたか、『監視者』」

声を掛けたのは雅だ。そしてその背中に隠れるようにして『ラヴ』もまたそこにいた。

場所は屋敷の地下牢。少しばかり『ラヴ』が楽しげなのは、かつてはそこに『ラヴ』自身が囚われていたからだろう。報復という訳ではないが、そこにローズが囚われていることが少しばかり面白いのだ。そしてローズは微かな息遣いや匂いなど、全身の感覚を鋭敏化させてローズの存在を感じ取り、まるで見えているかのように顔を向けた。

「ッ!!」

「……………。つたく、だから嫌いなんだよ、こういう奴ら」

言って雅は口を塞いでいたハンカチを取る。哀れみ、或いは同情にも似た視線を雅はローズに向けていた。

ローズは口を塞ぐものがなくなった瞬間、雅の手に噛み付いた。肉を引き千切らんとする勢い。下に見るな、という警告だ。しかし、雅は一切の抵抗を見せず、滲み出した血を淡々と眺めていた。

この程度、『あの時』に比べれば屁でもない。余裕の笑みを浮かべて雅は少しからかう。

「どうだ、半吸血鬼の血の味は?」

「ッ」

言葉と同時にローズは血を吐き出し、ぺっぺつと残りを全て吐き出そうとする。

「所詮、半吸血鬼だ。血を飲み込んだくらいじゃ、吸血鬼にはならねえよ。傷が回復するくらいだ」

ふふつ、と雅の後ろで『ラヴ』が笑う。

「……何が、目的なの？」

ローズの問いに雅は少し困った顔をする。特に何をするかを決めている訳ではなかった。唯、屋敷の前でローズが死なれるのは夢見が悪いし、とはいえ野放しにここに置いておくと『ラヴ』の行動が阻まれる。それだけの理由でこうしているだけでだった。微妙な沈黙の間に『ラヴ』は音もなく霧となつて、ローズの体に気付かないくらいの速度で体重を掛けていく。気が付けば『ラヴ』はローズに絡み付いた状態だった。

そして耳元でそつと、ごく当たり前のことを囁く。

「何だと思う？」

「ッ!」

ビクツと、ローズは体を強張らせる。蛇に睨まれた蛙、といった状態だ。しかし、実際は吸血鬼に絡み付かれ、舌を首元に這わされているのだから、数段階程状況は悪い訳だが。

「レイ、やめとけ。そいつにとっちゃお前は、凶悪犯罪者みたいなもんだ。あと何かエロい」

「吸血鬼に性欲はないけれど、半吸血鬼にはあるんだね。不思議だ」

「吸血行為自体が、そういうことじゃなかったっけか、確か」

「それは時と場合による。食事でもあるし、性行為でもあるし、はたまたもつと原本的本能でもある。——らしい」

「さいでつか。……とりあえず、離れてやれ」

「分かった」

小さく頷いて『ラヴ』はとたとたと雅の元に歩み寄る。露骨に、ほつとローズは肩を下ろした。足元まで来ると身長差が三分の二くらいだと明らかになった。見た目だけで言うなら兄妹のようだ。

しかし、立場は『ラヴ』の方が上だ。アイコンタクト、視線を送るだけでその意図を理解した雅は、やれやれと溜息を吐いて、胡座をかき。『ラヴ』は雅が組んだ足の上に胴体を背もたれ代わりにして、ちよ

こんと座った。

「さて、よく見ろ。これがお前達が忌み嫌ってきたご先祖様だ。なあ、お前、こんな奴を監視する為だけに一生を費やすのか？」

「あ。酷いなあ、餌のくせに」

後先を考えずに行動するのは、雅の悪い癖だ。

雅にとつては、唯の何気ない質問でしかない。これからローズは『監視者』としての役目を、数十年間送ることになる。それを良しとする人生観が、当然雅にはない。それ故の問いだった。

しかし、それはローズにとつては逆鱗だった。

「ふざけるな！ お前に何が分かるんだ」

激高と同時に銃弾が一発、雅の右肩を貫通した。強烈な威力のせいでは弾と同時に当たった右肩が脱臼する。だが、同時に『ラヴ』が動いていた。いや、正確に言えばローズよりも『ラヴ』の方が行動は早かった。

ローズの行動を先読みしての行動。しかし、予測よりも数秒早いローズの行動のせいで、雅の頭部を狙った弾丸が肩に逸れたのだ。そして、その後ローズは両手を『ラヴ』の小さな方手で掴まれ、背中を足で抑え込まれた。

「……………」

はあ、と溜息を吐く。肩に穴が開いていたのは一瞬だけ。即座に傷は塞がり、脱臼もまた自然と治っていた。ローズと『ラヴ』、両者の行動に雅は一切の反応がでなかつた。もともと、反射神経や運動神経は良い方ではない。

「とりあえず、殺すなよ、レイ。約束だろ」

「…………うん。だから、はい」

掴み上げていたローズの手から銃弾を奪い取り、雅に投げ渡した。

「んなおつかないもん、投げんな!? バカか!?!」

「大丈夫だよ。頭みたいなの複雑な部分に当たらなかつたら、雅は雅のままだから」

「頭に当たったら俺じゃなくなるってことだろ!?!」

はあ…………、と雅は頭を抱える。不老不死、無敵の吸血鬼様は生命を

脅かされることがないせい、危機管理はどうにも苦手なのだ。しかし、雅に溜息を吐かせた原因は別にあった。

それは一つの想定だ。雅はローズの体、服を調べ、最後には口を無理矢理に開ながら、その想定を確信にへと変えていく。

「手錠抜けの技術、ハンドガンの早撃ち。腰には二ト口爆薬か。両足元には投擲用のナイフがそれぞれ十本、靴は改造済みで底にナイフ、踵には火薬を積んで脚力を上げてるところか。んでもって、右奥歯に仮死薬、左奥歯にその毒の解毒薬」

淡々と雅はローズの服にそして体に仕込まれたもの、そしてローズの得意な攻撃手段を暴き出していく。

「次起きた時、お前は病院だ。んで、よく考えろ。——お前はそれでいいのか？ 人間でなく、人形で」

ガツと、雅は一度躊躇ってから、ローズを拳銃のグリップ部分で殴った。角の鉄の部分で殴ったのだ、出血は酷くローズの意識は一瞬で掠め取られていた。雅はその後に、自分の腕を引き千切り、まるでコップから水を零すかの如く、腕の中の血をローズに掛けた。雅の、半吸血鬼の特徴——傷の高速修復。その後使った右腕は意識するだけで喪失し、また同時に肩から先ににゆうと生えてくる。相変わらずピツ○口だなと他人事のように雅は思う。

傷は治っても意識は数日は戻らないはず。雅はローズが仕込んでいたあらゆるものを外していく。

「たかが十五歳が、手錠抜けやら早撃ちやらを覚えていい訳がねえんだよ。千年も、こいつらはこんなことをずっとやってんのか、バカらしい」

「……雅、千年じゃないよ。九百五十六年だよ」

吐き捨てるような雅の言葉に、ローズは無意味な訂正をする。そしてその訂正は補足になっていた。『ラヴ』の子孫達は九百五十六年間、ローズのような不遇の人間を生み出し続けていたのだ、と。

「さいでつか。……ちよつと、こいつを偶然発見して救急車を呼んで病院に運ばれるのを見送って来るわ」

「分かった。待つてる。ちよつとお腹空いてるから早く帰ってきて

ね」

「今日は俺が気を失うまで食っていいぜ。そうでもしねえと、寝られねえだろうからな、今日は」

「ほんとう？ やったー」

「せめて抑揚くらいはつけてくれよ」

そう言いながら、雅はローズを抱えて屋敷を出ていく。

こうして西条雅とアビー・ローズ・ヘイリムズの出会いは、最悪の形で終わった。

これはまだ一年も前のこと。西条雅もローズも十五歳、中学を卒業した後、高校に入学する前の微妙な時期の出来事だった。

亨と耀。彼らのチート。
亨と耀。彼らの日常

目を覚ますと同時に、頭の中に情報が雪崩れ込む。頭痛に近い情報の濁流に顔を顰めつつ、それらが収まると同時に亨はにやりと笑った。

面白いことが起こる、と確信していた。元々、知っていたことだ。だが、今日になってもそれが変わらないということは、今日それが起こるということだ。何が起こるのかは分からない。だが、それではよかったです。

「さて、と。ちよつとばかり、早送りしますか」と

亨に平日だとか休日だとか、そういう概念はない。学校なんてものは亨にとっては行く日もあれば行かない日もある、程度のものだ。教師陣もそれには慣れてしまつたらしく、休みの連絡をいれずとも特に問題なく授業が進められていく。

向かうは街外れの廃ビル群の一つ。それらは都市の発展を目指して行った無理な開発の成れの果てだ。しかし、開発はとある事情によつて失敗してしまい、それらを撤去するだけの資金すらこの街にはなかった。そうして人の管理から外れてしまったビルは、つまるところ人ならざる者達の管理下となっていた。

ビルの柱の物陰から耀が現れる。今回のことは何も言っていないが、それは言う必要がないからだ。恐らく、ほぼ確実にここに現れるだろうことを亨は推測していた。

「やあ、亨。こんなところで『偶然』ね」

「ほんとにな」

白々しい挨拶に苦笑いを漏らしながら亨は本題に移る。

「――で、お前は どう 視えた？」

「両方」

「やっぱりか。珍しいな、純然たる怪異と人間が手を組むなんざ」

「よね、『ラブ』と雅のコンビとかならともかく、今回は特殊で異例。まあ、どちらにせよ私達案件なのは違う訳だし……、どうする?」
「どうするって、何をだ?」

「ぶっ潰す? ぶっ殺す? ぶっ壊す?」

「はっ、んなもん、決まってるんだろ」

亨の表情に、納得の笑みを耀はさせる。

「全部、だよ(だね)」

爆音が響くと同時に、ビルの一つが崩壊した。本来、ビル群の一角が崩壊してしまえば、周囲のビルにも影響を及ぼす。最悪の場合、ドミノ倒しのように全てのビルが倒れてしまうことだって有り得てしまう。ところが、その崩壊にはそれが起こり得なかった。

なぜならビルは一瞬にして粒子レベルにまで分解されたからだ。周囲にいた人々——もとい、人成らざる怪異達は戸惑い驚き、そして同時に理解する。

「やばいぞー! あいつらが来たー!」

一人が恐怖に耐え兼ねて叫んだ。それを合図のように、分解されたビルがあつた場所に亨と耀が現れる。

「どーも、『やべーあいつら』でーす」

言葉と同時に、周辺にいた怪異が根こそぎ消え去ってしまう。一瞬にして祓われてしまったのだ。

しかし数体だけ、そこにいたどんな怪異よりも早く逃げ出していた者達がいた。

「ッ、なんでなんだよ! なんで、こんなに早く祓い屋が現れるんだよ! まだ、俺達は結集しただけだったのによ!」

「知るかよ! この中に仲間を売った奴でもいるんじゃないのか!」

「んな訳ねえだろ、俺達と奴らは絶対的な敵対関係じゃねえか!」

口論をしながら、彼らは逃亡を続ける。どこに逃げればいいのかなんて分かっていないが、少なくともこの街からは脱出した方がいい——そう思つてのことだった。

そんな彼らの目の前に、亨が落下する。真上から高速で落下した亨は、その手に自分の身長を優に超す大きな刀を持っていた。

「その通り。お前たちには裏切り者なんざいねえさ。唯、俺達の街で、俺達の庭で、余計なことを企んだ。それだけが、お前らの企てが失敗する原因だ」

一閃。それだけで怪異は祓われた。たった一体を残して。

怪異の中でも危険性の高い者として知られている鬼だ。知性を持ち、武器や他の低級怪異を操る怪異。しかし、そんな鬼に足はなかった。先程の一閃で切り飛ばされてしまったのだ。

「ほお、アレで死なねえとはな。さてはお前が今回のボスってところか?」

「……まあ、な」

鬼は只々、亨を見つめる。逃げることも命乞いをするこもしないのは、鬼としての矜持なのだろうか。そして亨はそれを好ましいと思う。

「久々だぜ、お前みたいにカツケエ怪異を見たのは」

「俺は初めてだよ、お前のような理不尽な強さを持っている者を見たのは」

「まあ、それは俺も自覚がある。ちよつとばかし、俺は理不尽だ。だから俺はあんまり出張らないようにしてんだよ、自分の活動範囲以外には手を出さない。そうでないと、まあ、怪異も人間も、俺は滅ぼすことになつちまうからな」

「……ッ。お前は、一体何者なんだ? あちらに行く土産話として、教えてくれないか?」

「いんや、遠慮しておくよ。それを知ったところで、お前は何もできない。俺は誰にも殺されないんだよ、悠々自適に生きて天寿を全うするんだ。世界がそう言っている」

「世界が、だと。お前、まさか、アカシックレコードを——!」

再び一閃。それで全てが終わった。

「じゃあな、鬼。今度、会うことがないように願つとくよ、お前の為にな」

耀Side どうせチート

コツ、コツ、と階段を登っていく足音が二つ。それは確かに響いているはずなのに、誰も耀と亨の存在には気付かない。二人は存在感そのものを消したのだ。十数階にも及ぶ階段を登り切る。

屋上には見張りの怪異が二体いた。亨は瞬時に、どこから取り出した大刀を構えて一振り。たったそれだけで怪異が一体消失する。同時に亨はビルの真上に跳躍。それと同時にもう一体の怪異が、相棒の消失に気付く。しかし、それではもう遅かった。

「ッ、お前は誰——！」

誰だ、と言うよりも前に耀は怪異に触れていた。そして、触れただけではよかった。

「さようなら」

怪異は砂となって消え去った。そして同時に耀も跳躍。場所を入れ替わるように亨がビルの中心、ヘリポートの『H』の中心部分を破壊し、爆音と共に地上まで貫いた。

「解析、分解、収集」

耀の言葉と共に、それらが全て起こっていく。ビルの構造を解析、それを元にビルが粒子レベルに分解され、それら全てを耀は自らの特殊なスペースに集める。そうして、ビル一つ、忽然と消えた。

ゆつくりと、物理法則を無視して低速で落下する耀がにたりと笑う。解析はビルだけではなく、ビル群にいた怪異と人間全てが対象だった。

「亨、怪異の方をよろしく。私は人の方をやるからさ」

「ああ、分かっているさ」

言葉と共にお互いに消え去り、亨は怪異へ、耀は人間が集まっていた方へと向かった。

「さて、ワルモノさん、こんにはー！」

元気な言葉と共に耀は人間達の前へ出現。そこは別の廃ビルの中階

「ッ！ 何者……え？」

男達が最後まで言い切れなかったのは、体が全く動けなくなっていたからだろう。まるで何かに縛られているかのように動けない。

「質問できるのは私だけだよ。まず一つ目、本当に怪異と手を組んで何かができると思ったの？」

「ああ、できるはずだったさ。お前が邪魔さえしなければな！」

「無理だよ。お前達は成功を収めたその瞬間に殺された。成功を収め、調子に乗ったお前達を見て、彼らは呆れて殺すんだ。彼らはともプライドの高い存在でね、アンタ達みたいな穢れた人間と関わったということを知った時点で、その事実を抹消しようとする」

「はっ、だから俺達を救ったってか！」

「いんや。死ぬ運命は変わらない。少しだけ早くなっただけの話」

「は？」

耀は極寒の笑みを見せて告げる。

「貴方達は故意に、悪意的に怪異と関わった。それはもう、どうしようもない穢れとなる。そんな人間の血で私達の街を穢すなんて、とんでもない。だからさ、お前達は存在諸共抹消してあげる」

言葉は力だ。特に耀の場合は、それが顕著である。言葉と共に彼らはビル同様に粒子となって消え去っていく。彼らは死に、そして消えた。

同時に、ペたんとして座り込み、そのまま大の字に寝転ぶ。耀が使った異能こと言霊は体力を大いに消費するのだ。

「だー！ 疲れたあ」

「お疲れさん。しかし、お前も容赦ねえなあ、人間だぜ、普通には殺人犯だぜ？」

「何言ってるの。私とアンタの妄想でしょ。そんな人間、はじめからこの世にはいなかった。そういうことになってんだから」

「死体の存在しない殺人は証明できない。故に罪ではない。誰だっけなあ、そんなことを言ってた阿呆は。悪影響受けてんじやねえか」

「さあ、誰だったっけね」

数秒の沈黙の後、亨は少し茶化すように耀に問う。

「……さて、これで俺達の街は平和に保たれた訳だが、この後どうする？」

「どうするって、んなの決まってるでしょ」

「まあ、そうだよな」

「学校に行く（か）」

そうして二人は一旦家に戻って制服に着替え、学校へ登校するのだった。

プロローグに戻って来るの好きなんです

亨と耀が学校に登校したのは、丁度二限目終了を告げるチャイムと同時にだった。休み時間の少し気の抜けた雰囲気の中に、二人はしれつと紛れ込んで、そのまま三限、四限と授業を終えた。

「だああ、お腹減った。亨、弁当あるー?」

「あるけど、お前にはやんねえ。俺の弁当だ」

「いいじゃん。あんたは全く必要ないじゃん。つてか、さつき食べてたじゃん」

「俺だって普通の飯も食うわ。食いてえなら、自分で用意しろよ」

はあ、と溜息を吐いて同時に頭を抱える。耀の自由気まま過ぎる言動に亨はいつも悩まされている。大抵のことを予定通り、推測通りにすることができる亨だが、耀はその対象外なのだ。

「えー。だって亨の作るの、美味しいんだもん。私が作るとなぜか暗黒物質になるからなあ……」

「それは、お前のセンスだろ。いや、お前の性質と言うべきか。——つて、お前、それ」

「んあ?ほうひはの(どうしたの)?」

口の中に沢山の白米やら何やらをかきこんでいた耀。その手には亨の弁当箱が。中身は既に空っぽ。

そうして、二人はプロローグに戻るのだった。

昼休みの半分を用いた鬼ごっこは耀の逃げ切りで終結した。当の耀は中庭の中心にある木に登り、木々の間に隠れていた。

「ふい……、逃げ切った逃げ切った。うん、やっぱり亨の料理美味しいなあ。その後に運動しないといけないのは、お腹が痛くなるけど、まあ、しょうがないかあ」

逃亡中に買っていた炭酸飲料を飲み干して、木の上からダイレクトにゴミ箱に投げ込む。

「あつ、ミスった」

空のペットボトルというのは存外、風に流されやすい。ビル風に似た原理で吹いた風に流されてペットボトルはゴミ箱から外れる。し

かし、それらは不自然な起動を辿って、そのままゴミ箱にホールインワン。

「ありがとう」

眩きながら木から飛び降りる。途端、上向きの風が吹き、とんとスキップのように降り立った。

「何から何まで」

ふんふん、と鼻唄混じりに廊下を歩く。西校舎と東校舎をH型に繋ぐ渡り廊下を通って教室に。当然、そこにはついさっきまで鬼役をしていた亨がいる。いつものこと過ぎるので亨の怒りも既に収まっている。何食わぬ顔で「遅かったな」、と宣っていた。

「ねえ、亨。私考えたんだけどさ、亨が私の分のものを作ればいいんじゃないの?」

「なんでだ!?!」

「え、だって、どうせこうなるじゃん。それに、いつも家でご飯食べてるしさ、もう一緒じゃん?」

「……………。はあ、まあ、いいか、どうせ、そんなに材料費もかかんねえし。そも論、金銭に関して言えば問題ねえしな。毎回食われるよりは、マシか」

「ま、どうせ、亨の分も私が食べることになるんだろうけどね」

「太るぞ?」

「太りません。私はそういう体質なんですわ」

「まあ、お前はアレ使うのにエネルギー大量にいるもんな」

「そういうこと」

と、そんな会話の合間にも、耀のお腹からは可愛らしい音が。

「燃費悪いな、お前。頼むから餓死とかすんなよ?」

言いながら亨は鞆の中から焼きそばパンを放り投げる。

「大丈夫。最悪、アンタに似た方法でエネルギー摂取するし」

「さいでつか」

そんなこんなでチャイムが鳴って、それぞれが席に着く。そう、これはたったそれだけの話。

俗に言う本編という奴です。
話をようやく進めます。

「すみません、雅先輩。お時間を取らせてしまって」

そう言うのは雅よりも一つ学年が下の少女。糸目で、笑みはどこか胡散臭い。とはいえ、この学校に最も胡散臭く怪しく、そして最強の人間を知っているのもこの程度、雅にとってはどうってことはない。

夕焼けの光が窓から差込み、光陰のコントラストは普通の教室でさえも怪しさを演出していた。

「別に構わないが、しかし、俺に用だなんて、変な奴だな、お前」

時を遡ること数時間前、昼休みに雅の教室へ少女はやって来て、放課後にこの教室で待っていて欲しいと言われたのだ。当然、そんなことは初めてだ。告白でもされるんじゃないか、と周囲の生徒にもてはやされ、ローズはどこか不機嫌だったがそれはともかくとして。どうして自分なんかを、と雅は疑問に思っていた。

「そんな！ 雅先輩は私達の中では結構有名なんですよ？」

「そうなのか？」

「ええ、だって珍しいじゃないですか。吸血鬼に血を提供する人間、って」

少女の言葉と同時に雅は後ろに回り込み、常備している小型のナイフの刃を少女の首に触れさせた。たたり、と一筋の血が流れる。

「っ、物騒ですねえ、乙女の肌は何をするんですか」

「流石にこの程度じゃ、慌てねえか。それで、何の用だ、化け狐が」

「あははは、流石に見抜いていましたか。とはいえ、純然たる妖狐という訳ではないんですけどね、私は」

言って少女はぴよこん、と狐耳、そして尻尾を顕す。物理的には視えないが、多少の靈感や目を持つていれば分かる。一度、少女の目の前に刃を見せてから雅は再び席に着いた。さっきのは単なる、俺は殺すことに躊躇いなんてないぞ、という警告だ。

「狐憑きか、初めて見るな。何せ、こちらとら本物の怪異と触れ合っ

んでね。当然、相対するのも本物ばかりだ」

「ええ、噂はかねがね。私の式達から聞いています」

「式神……使役するタイプ、ってことは呪われたって訳でもなさそうだな。憑きモノ筋の家系か？」

「そんなところですよ。狐とは縁の強い家系でしてね。何しろ、私の家系で一番有名な人の母親は妖狐ですから」

「母親が妖狐、だと？　ってことは、お前は……」

「ああ、そう言えば自己紹介が遅れましたね。私は土御門晴香つちみかどはるかと言います。以後お見知りおきを」

「土御門って言えば、安倍晴明の子孫か。ってことは、陰陽師。しかし、自らに怪異が憑いているというのは皮肉だな」

陰陽師とは元は占い師、しかし陰陽五行思想に則って怪異を祓うという祓い屋の中の最大派閥でもある。噂によれば祓い屋の組織の幹部の大抵は陰陽師だとか。そして土御門家は伝説にして最強の陰陽師安倍晴明の子孫だ。つまるところ、怪異と敵対する存在。そんな一族の人間が怪異に憑かれているというのは、皮肉だ。

「これは自業自得なんです。昔、少しありましてね。コレのせいで一族からは勘当されてしまいました」

「……………」

「どうかしましたか？　私の不幸な人生に同情でもしてくれましたか？」

よよよ、と大袈裟な泣き真似をする晴香に、嘆息を漏らして雅は問う。

「俺にそれを話してどうなる？　お前は今、私のバックには何もありません、って告白しているようなものだけ？」

「ええ、だからですよ。私には何の後ろ盾もありません。だからこそ、私を利用しませんか、と言っているんです。勘当されたとはいえ、私は陰陽師として優秀な人間だと自負しています。そして、私には完全記憶能力がある。この意味することが分からない貴方ではないでしょう？」

「交渉って訳か？」

「はい。その通りです。いえ、どちらかと言えば懇願ですかね。私の全てを差し上げますから、たった一つだけ、手を貸して欲しいのです」
「全て、ねえ。そういう大袈裟な取引するのは、むしろ不信感を与えるんだぜ？」

「しかし、事実ですから。私は、私の全てを差し上げます。お金も、持っているモノも、知識も、何なら処女だって捧げてもいいくらいです」

「ぶっ!? お前、何言ってるのか分かってんのか!?!」

「勿論。ああ、もう一つ。私の命さえも、好きなだけお使いください。悪魔と契約する機会もあるでしょう。その時の取引として、私なんかの命でよければ」

「……………」

「……………」

雅も晴香も、無言のまま相手の目を見据える。相手の真意を探り、企みを看破しようと。数秒にも数時間にも感じられる沈黙の後、雅は「ああ、と息を吐き出した。

「まあ、どちらにせよ、だ。残念ながら今の俺は肩身が狭くてね。好き勝手に動くことができない有様だ。だから、さ」

言って雅は、晴香の目の前でパンツ、と両掌を合わせ。

——晴香は雅が住まう屋敷の客間にいた。

「……………」

思わず、と言った風に晴香は戸惑いの声を漏らす。同時に晴香の左側、首元にかぶり付く少女の姿が。レイが歯を立てて吸血したのだ。

「ッ!?! ——ア!!」

悲鳴を必死にこらえて晴香は吸血が終わるのを待った。何せ、右のこめかみには拳銃が突き立てられている。引き金には既に指が掛けられ、ローズが冷酷に見下ろしていた。その眼は明らかに、人を殺したことのある眼だ。

「ふむ、やはり肝は据わってるな。あの状況でよくもまあ、我慢できたもんだ。普通、恐怖で意識を失うもんだぜ」

「……………色々、あつたんですよ、昔に」

「へえ。で、レイ、どうだ？」

「うん、『奴等』の気配は感じられない。嘘の味もしない。この子は、本気だよ」

「……ッ、血つて、そんなことも分かるんですか」

「血つていうか、その中の遺伝子だな。遺伝子つてのはある種の記憶媒体だからな。レイはそこからお前の記憶や意識、意思なんてものを読み取ることが出来る。まあ、ともかくだ。よかったじゃねえか、これで少なくとも二人の信用を勝ち取れたって訳だ。話を聞こうぜ」

「……もう一人の信用は、どうやって勝ち取ればいいんでしょうか」

言つて晴香はちらりとローズの方を見る。未だに拳銃は突き立てられたままで、微動だにしていない。

「ローズ、とりあえずそれは降ろせ。お前の早撃ちなんざ、普通の人間は避けないさ」

「それもそうですね。では、とりあえず話くらいは聞きましょうかね。その後、殺すかどうかは考えることにして」

にこり、とローズは笑つて自然と雅の左隣を陣取る。しれっと、いつの間にかレイは雅の膝の上に座っており、雅はレイの頭に顎をおいている。

一家団欒、というのはこのことだろうか、と状況には似つかわしくないことを一瞬、晴香は思う。が、即座に思い直して、自らの身の上を語る。

「私は、土御門家をぶっ潰したいのです。その為に、協力してください

——」

晴香は語る。人生を。怒りを。

さて、これは私の、土御門晴香の一人語りです。

私が生まれ、今に至るまでの人となり語る訳です。とはいえ、私
が生まれた時が何グラムだったか、などは一部の好事家くらいしか興
味が無いでしょう。なので、要約して、かいつまんで、省略して、語っ
ていこうと思います。

私が生まれた土御門家は祓い屋稼業で大成した一族です。陰陽師、
陰陽五行説に基いた呪術を用いた流派です。元々は官職であったこ
とも含めて、それはもう大層なお金持ちでした。まあ、そのお金は全
て汚れたお金なんですけどね。

陰陽師は怪異と祓うことを主としています。その資金は怪異祓い
によって成され、そして怪異を研究する為に消費されています。

陰陽師のみが持つ特殊な契約儀式、式神というものをご存知でしょ
うか。あれは怪異に名付けを行うことで手懐ける、言わば呪いです。
怪異を自由に操る特殊な呪術でして、つまり、怪異による被害を人工
的に創り出すこともできる。

ええ、はい。陰陽道の廃れた現世であっても土御門家が祓い屋稼業
の中でその権力を持っているのは、そういう訳です。

人への呪いの行使。つまりは、競争相手を呪術によって殺す。そう
することで土御門家はその地位を揺るがざるものにし、また資金を得
る為に罪のない人々を、呪い殺した。

時には式神に暴れさせ、それを祓うことで揺らぎかけた地位を固め
たという事例だってあります。

そう。土御門家なんてものは、潰れて当然の、穢れきった最悪の一
族なのです。

……………そして、私とその穢れの象徴です。

人を呪わば穴二つ。他人を呪えば、その呪いは自分に返ってくる。
そういうものなのです。だから、土御門家は呪いを受けた。その呪い
そのものが、私なんです。

はい。そのとおり、妖狐です。私に取り憑いているこの妖狐は管狐

と呼ばれる妖狐です。飯縄権現とも言いますね。彼らはとても優秀な従者ですが、彼らは私の成長につれて増殖するという性質を持ちます。優秀な従者が増えるのはいいことのように聞こえますよね、ですが、違うのです。

彼らは言わば私の分身。私の生命力——霊力を食らって存在します。つまり、増えれば増えるだけ、私の命が削られていく。約七十五匹。それだけ増えてしまうと、人間の寿命は尽きるというのが一般的でしょう。

そして、憑かれた私の寿命が憑きてしまった、その時が、土御門家のゲームオーバーだったのです。管狐に憑かれた人間が死ぬと、その一族に一匹ずつ管狐は憑き、更に増えていきます。倍々ゲームで土御門の血を受け継ぐものは死んでいく。

そう、これが呪いです。私という爆弾を抱え、それが爆発した瞬間、土御門家は滅びを迎える、そのはずだった。

——ですが、彼らはその対処法を知っていた。
いえ、知っていたからこそ、土御門家は私を生んだのです。

私の父親は土御門家の分家の分家の分家くらい、下っ端でした。そんな彼が、土御門本家の母親に見初められ、私を生んだ。そんな奇跡の子供なのだ、私は昔教えられました。

ですが、奇跡なんてものは大抵の場合は偶然か、或いは作為的ではありません。

私は捨て駒だったのです。

私が生まれた直後、父親は死にました。自殺です。土御門家を滅ぼす爆弾を生み出してしまった、とね。

ですが、それすらも土御門家は計算ずくだった。土御門本家のことを第一に考えるような、そういう人間をわざと爆弾の親にしたのです。邪魔者を手つ取り早く処分する為に。

私が生まれた直後、即座に私は土御門家から縁を切られました。物理的、書類的、そして呪術的に。さて、両親共に土御門家であり、その土御門家から縁を切られた私が死んだ時、さて、管狐はどこに行くのでしょうか。

……はい、その通りです。どこにも行けないのです。管狐はそれで一度滅ぶ。土御門家には何の影響もない。たった一人、私だけが野垂れ死に、それで全てが終わる。

次の管狐が土御門家に憑くまでには数十年の猶予があります。逆に言えば、私が生まれたその時点で土御門家は更に数十年間、のさばるといふことです。

土御門家は、そんなことをこと行い続けているんです。
だから。

「だから、私は、土御門家を滅ぼしたい。土御門家によって殺されるのなら、土御門家を巻き込んで死にたい。それが私の願いです。どうか、どうか、協力していただけませんか？」

そう簡単に雅は決断をしない。それは過去の経験に基づく。

「なるほどな。大体事情は分かった。……それで、どうして今なんだ。何故、このタイムミングでお前は俺に頼んできたんだ？」

例えば、今すぐにでもぶつ潰したいというのなら雅の存在を知った、その時点で接触を図るだろう。逆に、何かを計画しているのなら、当然、雅達と接触するのになら、余計な混乱を招かない為に慎重に行動するはずだ。

だが、今、このタイムミングというのはそのどちらでもない。それも接触の仕方唐突で、少しばかり雑だった。

「元々は、もう少し後にするはずだったんです。ですが、状況が変わりました。丁度、今朝」

「ほう？」

「三ヶ月後、土御門家は、とある怪異達を暴れさせる予定だったんです。分かりやすく、典型的な日本の怪異。鬼を。私はそれを利用し、活用し、土御門家を崩壊させる予定だった。ですが、その計画が丁度今朝、失敗に終わったんです。鬼、人間共に全滅という事態によって」

「全く、何が起こったのか分かりません。ただ、一つ決定的なのは、怪異も人間も、共に最初から存在しなかったことになってるんです。まるで存在を抹消されたかのように。覚えているのはそれに関わりがあった人間だけ」

少しの間があつて、晴香は続ける。

「想定外と言えば想定外ですが、むしろ好機です。土御門家の目的は失敗し、再び計画するのに少しだけ時間が掛かります。その隙を、私は突きたい」

なるほど、と雅は呟く。

「それで、今日唐突について訳か。なあ、その返事、今すぐじゃなくちや駄目か？ 少し考えたいんだが」

「……三日。それくらいなら、待てます」

「了解。なら、二日後だ。二日後、今日と同じくらいの時間に、教室に
来い」

「分かりました。良い返事を期待しておきます」

「どうだろうな。ま、とりあえず、送ってつてやるよ」

もう一度、雅は拍手を打つ。たつたそれだけで晴香の家の前に移動
していた。十階建てのマンションの、二階だ。既に闇が世界を支配し
ており、この世ならざるもの達の独壇場となっていた。

「……どうい、理屈なんですか、これ」

「猫騙しだよ。あれは、あの拍手によって人間の思考を停止させる術
だけど、その応用だよ。お前にとつちや、一瞬の出来事だが、実際には
十数秒の間隔が空いている。十数秒もあれば、空間転移くらい楽勝
だろう？」

と、雅は笑う。が、晴香にとっては笑えた話ではなかった。

思考を停止させる。

十数秒で空間転移が可能。

どれも物理法則や呪術法則を凌駕したものだ。流石は、規格外の化
物、吸血鬼だ、と頬を引きつらせる。

「そ、それでは。……本当に、お願いします。よく考えてください」

「ああ、考えておくよ。……だが、その前に一つだけ質問させてくれな
いか？」

「なんででしょうか？」

「土御門家とは、生まれたその時点で縁を切られたって言ってたよな。
じゃあ、なんでお前は土御門家の情報を知っている？ お前、まだ隠
していることあるだろ？」

言葉と同時に雅が放ったのは、ある種の殺気だ。返答次第では、殺
すぞ、という類のもの。

「ッ」

「ああ、残念ながら答えを聞くまで返すつもりはないぜ？ 俺は気が
長いんだ、幾らでも待ってやるから。だから、答えろよ」

「……ッ」

「おやあ、何か隠し事でもあったのかなあ？ おかしいな、俺に協力して欲しいって懇願してきた割には、何かを隠すなんて余裕があるんだな、お前」

「信じてくれたんじや、ないんですか？」

「んなことは一言も言ってねえけど？」

「そんな！ 貴方の家で、確かに……ッ」

雅の淡々とした口調に、晴香は雅が屋敷で言った言葉を思い出す。

——よかったじゃねえか、これで少なくとも二人の信用を勝ち取れたって訳だ。

「ッ。そういう、ことですか」

確かにあの時、二人の信用を勝ち取ったのだろう。ローズとレイの二人の信用を。あの時、晴香を疑っていたのは雅だったのだ。

「で、答えは？」

「……私には、兄がいました。私のことを助けてくれた人です。そして私に土御門家の技術を、中身を、土御門の全てを教えてくれた人です。兄は、土御門家を嫌悪していました。だから、それがバレて殺された。……土御門家を潰したいというのは復讐なんです。私と、そして兄の為の。これで、いいですか？」

「ああ、まあ、その言葉は信じてやろう。この状態で嘘を吐けるなら、相当のものだからな。……とりあえず二日くれ。ちゃんと判断してやる」

「……ありがとうございます」

今度は、猫騙しを行うこともなく雅は帰路に就く。その中、屋敷が視界に入ったくらいで、スマートフォンを取り出し、とある人物に連絡する。

「……ああ、俺だ。一人、教えて欲しい人間がいる。ああ、そうだ。土御門晴香について、教えて欲しい。あらいざらい、全部、な」

STRAT

雅と土御門晴香の邂逅の翌日。雅の屋敷の周辺に蠢く人影があった。頭が一つ、手が二つ、足が二つ。それらが繋がっているから人影と形容するが、しかし、それが人なのかどうかは定かではない。

影があるだけで、そこに実体は確認できないのだ。

隠形術。陰陽師が使う、認識阻害の術。

「……んー、土御門家つてのは、案外、頭が悪いのかねえ」

という雅のボヤキ。まあ、つまるところ、相手側の隠形術は効果を成していない、という訳である。

「雅、気を付けなさいよ。私達の間でも、土御門家は敵に回さない方がいい、つて言い含められているし」

丁寧語を崩して、素を見せているローズが、少しばかり緊張した面持ちで告げる。土御門家の嫌な話は、晴香から聞いている。自らに對抗する勢力を風潰しにしていく。その手が、日本で留まる訳がない。特に今となっては、世界の裏側だって数日以内に往復できる。ならば、その手を伸ばすのは当然だ。

「敵に回さない方がいい、か。それじゃ、もう手遅れだ。完全に、土御門家は俺達の敵だ。予想通り、な。つたく、念の為に亨に聞いておいてよかったよ。あいつら、生贄さえも利用し尽くしてやがる」
「どういうこと？ つていうか、亨つて、あの亨？」

「そ。その亨。あいつは情報屋みたいなものだからな。この世のもの全ての情報を、あいつは握ってる。過去も現在も、未来もな」

「……何者なの、亨つて」

「さあ、一種の怪異みたいなものさ。それが人間という実体を持って生まれた。いや、人間の姿をした怪異。いや、怪異であり人間でもある。いや、……。面倒臭え、とりあえず、亨は、亨だよ。あいつは死ぬまで亨のままだ。それをどう利用するか、或いはどう利用されるか。ま、その辺りはなるようになるよしか言いようがない」

「よく分かんない」

「分からなくていいんだよ。俺も正直、あいつについては半分も理解

してない。とりあえず、そうだな、必要以上に関わるな、とだけ言うておく」

「そう。——それで、アレ、どうするの?」

「ん? もう何もしねえさ。既に対処は済んでる。どうせ、あれは土御門家の中でも雑兵だ。或いはもつと下、どつかから金で雇われて簡単な技術だけ教えられた、陰陽師もときだろ。んなの、血祭りに上げるに決まってるんだろ」

にたり、と残酷な笑みを見せながら雅は言う。

雅の意図を理解して、ローズはぞくりと、背筋を凍らせながらも、笑う。

流石は、西洋魔術有数の家系、ハイリムズ家の現当主だ、と。

「俺達を、敵に回したことを後悔させてやる、東洋魔術代表、土御門家さんよ」

同時に起こったのは存在の消失だ。

隠形で隠れていた数百人と、数千体もの怪異達が、同時に消失した。悲鳴すら上がらず、はたまた彼らには何が起きたのか理解する時間すらなかった。突然、消失したのだ。

だが、それは晴香が言っていた鬼と人間の消失とは意義が違う。そこには血痕や、彼らが来ていた衣服、獲物が転がり落ちている。彼らがいいたという情報は世界から消えてはいない。

そう、ただただ、彼ら自体が消えただけ。正確には、殺された直後に転移されただけ。場所は、土御門家が有する土地全域。

「さあて、一年ぶりの戦争だ。狼煙は、盛大にしねえとな」

「ということは、晴香の依頼を受けるってこと?」

「まあな。利用され尽くす立場だった奴が、俺を利用し、敵をやっつける。協力してやろうじゃねえか、面白え」

「……そう」

こうして、雅率いる西洋魔術と土御門家率いる東洋魔術の、魔術戦争は幕を開けた。

世界が求めるモノ。それを求める者。つまり、彼が求める者。

翌日。依頼者である土御門晴香を置いてけぼりにして行われた、土御門家からの宣戦布告。それを晴香が知ったのは、その日の夕方。つまり、雅が晴香の依頼を受けるかどうかの答えを聞く時だった。

「ッ、土御門家から、刺客が送り込まれていたんですか!？」

「まあな。全員、向こうに返したがな。肉体だけ」

売られた喧嘩を買った。土御門家を完全に敵に回した。そんなことを雅はまるで今の天気を言うくらいのもので答える。晴香はその神経が分からず、内心でぞつとする。だが、それをおくびにも出さないのは、それよりも考えるべきことがあったからだ。

「でも、一体どうして、雅先輩のところ……」

「お前だよ。生贄の首に鈴でも掛けてたんだろ。お前が復讐を依頼した人間を殺す為に。なんせ、土御門家の内情を知る者が協力をするような相手だ、それはつまり土御門家にとって脅威になり得る。そういう人間を炙り出すなんてことを、お前の家はお前を利用してやってるってことだ」

「ッ。そんなの」

「狂ってんな。けど、それくらいが丁度いい。そのくらいの相手じゃねえと、張り合いがねえからな」

「……じゃあ、受けてくれるんですね」

「ああ。それで、だ。少し提案なんだ」

「構いませんよ。私は、土御門家が潰せれば、それでいいんです」

「そこだ。土御門家を潰すっていうのが、お前の希望だな？」

「……はい」

「だけど、それだけじゃあつまらなくないか？ それに、だ。土御門家の持つ情報を失くすってのは、随分と惜しい。お前から得られる情報だけではなく、俺は土御門家本家の、何ならば当主レベルの存在しか知らないような情報すらも掠め取りたいんだよ」

「強欲、ですね」

「ああ、強欲だ。人間ってのは基本、強欲だろう？ 俺はその欲を、肯定しているんだ。欲ってのは人類が発展する為のエネルギーだ。呪術も、魔法も、科学も、妖術も。何もかも、人間の欲から発展されたものだろう？ ならば俺は人類の為に、俺はその欲を肯定する」

「……………」

「まあ、ともかくだ。完全にぶっ潰してしまうのは、少しばかり俺は不本意だ」

「じゃあ、どうすれば先輩は心地よく私の復讐に賛同して頂けるのですか？」

「なに、簡単な話だよ。土御門家が持つ情報だけを抜き取って、お前の気に食わない土御門家の人間を消していく。——土御門家に乗っ取るんだよ。お前が、土御門晴香が、土御門家の当主に成って、全てを終わらせるんだ。どうだ、最高じゃねえか？」

「……………そんな、の」

土御門家を、自らのものにする。もしもそれが可能ならば、それはつまり日本の呪術界で絶対的な力を得るということを意味する。そんな馬鹿げた話を晴香は信じるつもりはなかった。そんなことは不可能だ、と晴香は冷静に判断したからだ。

「できません。物理的に不可能です」

「できるさ。呪術的にできる。全員をぶち殺して、お前が新しい土御門家を創るんだよ。作り直す。いいじゃねえか、絶縁された人間が腐敗しきった家を立て直す。そういう美談にすればいい。復讐譚も、最後にはそんなことになればいいんだ」

「……………綺麗事です」

「綺麗事がどうした。世界は綺麗ごとで満ちているだろ。だったらどんな汚いことも、綺麗ごとにしてしまえばいい。世界がそれを求めているんだ。お前のどんな醜い復讐譚だって、語られてしまえば美談だ。——土御門晴香の美談を語りたんだよ、あいつは」

鑑賞そして、干渉者。

「あはははっ!」

「あ? どうした耀、病気か? いや、病気は元から——ぐはっ!?」

「ぶっ飛ばすわよ、享」

「ぶっ飛ばしてんじやねえか! ったく……、で、何だ?」

「いんや、ちよつとね。雅が私達に変な期待をしてくれてね」

言つて耀は自分の頭をトントンと指差す。意図を理解し、そして同じように享も笑いだした。

「……。くはっ! なるほどな、そりや、笑わずにはいらねえな。悪かったよ、耀」

「でしょ、最高だよな」

くくつ、はははっ、と享も耀も笑う。笑いながら——敵を屠つていた。

「ッ!! 貴様ら、何者だ!」

「何者だあ? お前らが殺そうとした雅のお友達だよ。まあ、アイツはどう思ってるのか知らねえけどな」

言いながら享は、刀をぶんつ、と振る。同時に周囲一体に強烈な風が巻き起こり、そしてその風が目の前の人間を切り裂いた。

「そーそ。私達は、ただ、お友達の意趣返しに来ただけ。まあ、別に被害を被った訳じゃないんだけどね、私達も、雅もね。むしろ、被害を受けたのはそちら——土御門家な訳で。だから、正確に言うなら、泣きっ面に蜂の巣でもぶつけようかな、としに来た訳」

あははは! と笑みを見せながら耀は、襲つて来る低級の怪異の存在を、無かったことにする。

「まあ、つまりはタダの暇潰しさ。黙ってやられてろ」

そう、暇潰しだ。いや、暇潰しの為の余興に過ぎない。

享と耀の暇というのは、享と耀の行動によって潰れることはない。彼らにとつての暇潰しとは、他人の行動を知ることだ。この先に起こるであろう、予め決まっている未来を覆すという、人間誰しもが持つ未来^{ちか}改^ら変を楽しむ。それが彼らにとつての暇潰しだった。

そして、それ故に二人は追い込む。片方、それも不利であると判断した側の陣営を。徹底的に。

享と耀は、土御門宗家の土御門家宗家しか知らない場所を襲撃し、有能な力を持つ者全てを屠った。彼らの勝ち筋のほぼ全てを叩き潰し、彼らが——東洋魔術師と西洋魔術師の大戦が行われるよりも前に、その勝敗を決定づけた。

但し、たった一つ、土御門家側ですら禁忌とされている一つの方法だけを残して。

つまり、その方法を使わずにはいられない状況を作り出した。

「さあ、お前達には、あの方法しかなかったな。土御門家当主、つちみかどはるあき土御門晴明さんよ」

「あれを使わなければ、お前達の栄光は、ここで途絶えることになる。お前達がただの捨て駒にしか思っていないなかった少女、土御門晴香の逆襲によって、今度はお前達が生贄に成り下がる。お前達には、もう手はない。選べ。九尾の狐を——玉藻前の解放を。お前達はそれを選ばなければならぬ。それが、西洋魔術師最強の人間、西条雅を敵に回すという選択の対価だ」

火薬庫に、火花が落ちる。

玉藻前。別名、白面金毛九尾の狐。権力者を誑かし、多くの人間の虐殺を愉しみ、しかし、最後には陰陽師、安倍晴明にその正体を看破され、封印された、三大悪妖怪の一体。豊穰の神、御結神を祀る稲荷神社の中には、玉藻前が最後の抵抗として成った殺生石の欠片を封印し、それを崇めることで無毒化している場所もある。狐を使者とする御結神は、つまり狐を従える、従わすことができる。それ故の発展であり、確かにその効果は覲面だ。

但し、そのほとんどの場所の、殺生石は現在、偽物だ。何故ならば、殺生石は現在、一つと成つてとある少年の心臓の代わりを成しているのだから。

少年の名前は、土御門明俊。土御門家の分家の一人である明俊は、死者だ。土御門家繁栄の犠牲の一人。但し、その死体を利用し、殺生石を加工、埋め込み、いわば一体の怪異を蘇らせた。

そう、つまり、土御門明俊とは、玉藻前だ。そして、彼は今現在。

——高校生活を送っていた

「明俊。お前、どうしたんだ？ そんな風にぼうつとしてさ」

「あー、いや、ううん。何か、ちよつと嫌な予感がしたんだ」

「？ なんだそれ、変な奴だな」

「いや、逆立ちしてる君言われてもね」

「修行だからな」

「何の？」

「サッカーの」

「足使つてないのに？」

「逆に、だ」

「そうか。逆に、か。うん、逆なら仕方ないね」

「んな訳ねえだろ!? バカなのかお前は！」

「理不尽にキレないでくれるかな!? バカなのはそつちでしょ？ 赤

点連続記録を更新し続けてる訳だし」

「ぐっ。お前な、何正論で論破してくれてんだよ！ 腹立つな！」

「また理不尽にキレる！ 凄いね、悠斗！」

「いやあ、それほどでも」

「褒めてないからね!？」

やいのやいの、と、朝から、教室で、明俊と悠斗はハイテンションだった。

高校に入つてできた友人である、今野悠斗。彼は随分と、面白い性格をしていて明俊としては退屈しない日々の糧になっていた。そしてもう一人、明俊の日に欠かせないのは――。

「またアンタらは、漫才してんの？ 本当に、漫才師目指したら？ いい線言つてると思うよ?？」

「京子……。いや、遠慮しとくよ。それに僕らは、漫才師じゃないしね」

「あー、まあ、そうだけどさ」

笑つて、京子――伊達京子は教室の中を視る。明俊、悠斗、京子の三人以外は、きちつ、とまるで軍隊の如く姿勢の良さで着席する、生氣のない生徒達の姿。いや、死んだ少女少女の姿があつた。

「僕らは漫才師じゃない。死霊傀儡師だ」

「よつと」

逆立ちを、ようやくになつて止めて、悠斗はパンパンと手を払う。

「んで、久しぶりにお前さんをご招集とは、上の方は何をやらかしたのかねえ」

「さあね。だけど、今回は、なんでもござれ、だつてさ。つまり、本気を出してもいいってこと」

「ふうん。じゃあ、暴れますかあ。相手は、ふうん、西条雅、か。吸血鬼、西洋怪異かあ、これは初めてだね。ん、決めた、彼は、僕の駒にする。それ以外は、うん、君達にあげるよ」

「んー、じゃあ、私はこの晴香つて子かな」

「じゃあ、俺はアビーつて奴で。こりや、いい、人形ドールになる」

「狙いは決まった。じゃあ、行こうか。日程は、一ヶ月後。タイミングは各々の、方法で」

「了解」

こうして、メンツは揃った。最強にして、最凶の、西洋呪術師と東洋呪術師。彼らの戦いは、真の意味で、火蓋を切った。